



茅ヶ崎台

令和8年 8月 28日
横浜市立茅ヶ崎台小学校
学校だより
第400号



シンボルツリー ベニバナトチノキの未来について

校長 市川 琢也

長い夏休みが終わり、学校に子どもたちの元気な声と笑顔が戻ってきました。それぞれのご家庭で、普段とは少し違った時間を過ごし、さまざまな経験を重ねられたことと思います。子どもたちが一回り成長した姿で新たな学校生活をスタートできることを、大変うれしく感じています。

一方、この夏休み期間中には、地震や大雨などによる災害が発生し、多くの方々が被害に遭われました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早く穏やかな日常が戻ることを願っております。こうした出来事に触れるたびに、当たり前のように過ごしている毎日の尊さや、自分や周りの人の命を守る大切さを改めて実感します。学校でも、子どもたちが安心して毎日を過ごせることを第一に考え、教育活動を進めてまいります。

さて、本校は平成6年4月1日に開校し、今年で33年目を迎えました。これまで地域や保護者の皆様に温かく見守られながら歴史を積み重ねてきたことは、さまざまな教育活動や児童の姿、そして地域の皆様のお話からも強く感じるところです。

本校のシンボルツリーであるベニバナトチノキは、開校当時から春には鮮やかな紅色の花を咲かせ、夏には大きな葉を豊かに茂らせながら、子どもたちの登下校を温かく、そして雄大に見守り続けてきました。校章にも、緑豊かな地域の中で子どもたちが伸びやかに成長していく姿を、若葉が大きく広がる様子になぞらえて表現したベニバナトチノキが描かれています。本校には、正門前と中庭に2本のベニバナトチノキがあります。そのうち、登下校を見守り続けている正門前の木について、樹齢を重ねる中で幹の内部に空洞が生じていることが確認されました。今もなお大きく枝葉を広げる雄大な姿は変わりませんが、子どもたちの安全を第一に考え、樹木の状態を確認しながら必要な対応を進めています。

その取組の一つとして、6年1組の子どもたちが、このベニバナトチノキの命をどのようにつないでいくのか、また、伐採することになった場合にはどのような形でその歴史や思いを残していくのかについて考えています。7月10日には、地域協力者であり開校時にご尽力いただいた吉野富雄さんから、ベニバナトチノキの歴史についてお話を伺いました。また、地域コーディネーターの皆様にもご協力いただきながら、区役所や地域企業と連携し、子どもたちの考えを形にするためのさまざまな取組を進めています。



さらに、本校は横浜市の取組である「持続可能な社会の創り手育成事業」に参加し、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点から、他校や企業等との連携を図りながら、シンボルツリーの歴史を未来へつなぐ活動を進めていきます。

どのような形でベニバナトチノキが受け継がれていくのか、現時点ではまだ分かりません。しかし、このような課題を自分事として捉え、他者と協働しながら実際に行動できる子どもを育てる教育活動として、幅広い学びにつなげていきたいと考えています。

開校33年目を迎えた今、これまで茅ヶ崎台小学校を支えてくださった皆様への感謝の気持ちを大切にしながら、歴史が途切れることのないよう、本校を温かく見守り続けてきたベニバナトチノキの未来について、地域や保護者の皆様とともに考えていきたいと思っています。